

音楽評論家に聞く2021年の収穫 公演正常化へ一歩

2021/12/27 5:00 (2021/12/27 11:39更新) | 日本経済新聞 電子版

2020年に続き、音楽業界はコロナ禍で耐えることを余儀なくされた。それでも、公演正常化への努力が実を結びつつある。評論家が一年を振り返る。



ロッシーニ歌劇の魅力を知らしめた新国立劇場「チェネレントラ」=寺司 正彦撮影

クラシック 円熟の至芸ツィメルマン 江藤光紀

- ①ファビオ・ルイージ指揮NHK交響楽団（11月、東京芸術劇場）
- ②クリスチャン・ツィメルマン ピアノリサイタル（12月、サントリーホール）
- ③VS Vol.1 反田恭平×小林愛実（12月、東京芸術劇場）

今年も最後まで気が抜けない1年だった。状況に臨機応変に対応した現場の皆様に、改めてエールを送りたい。来日はアーティスト単独か小規模団体に限られ、オペなどは依然として難しかった。日常性が徐々に戻ってきた秋以降に名演が多かったという印象だ。

- ①来期より首席になるルイージは、独逸系の様式感と南欧のパッションを併せ持った、今のN響にとって理想的な指揮者。
- ②美音、サウンドのコントロール力、プログラミングの妙と語り口の多彩さなど、あらゆる点で高水準。公演全体を一つの体験へと昇華させる円熟の至芸。
- ③ショパンコンクール入賞者による連弾・2台ピアノ。2つの個性が寄り添いながら、ニュアンスにあふれる表現を紡いでいった。若い聴衆も多く、未来の可能性を感じた。

オペラ 新スター誕生 脇園彩 山崎浩太郎

- ①「チェネレントラ」（10月、新国立劇場）
- ②東京・春・音楽祭「マクベス」（4月、東京文化会館）
- ③「オンリー・ザ・サウンド・リメイન્ズー余韻一」（6月、東京文化会館）

昨年に比べればコロナ禍による中止や延期は減ったが、海外からの入国は混乱がくり返された。このため、主役の歌手や指揮者の交代が日常茶飯事となり、主催者の緊急対応能力が問われ続ける1年となった。

そのなかで①は主役の脇園彩が素晴らしく、花も実もある新たなスター歌手という印象を決定づけた。他の歌唱陣も充実し、ロッシー二歌劇独自の魅力を広く知らしめるものだった。

②は演奏会形式だが、今年80歳の指揮者ムーティの情熱が若い歌手と演奏者の可能性を引き出し、ヴェルディの音楽とドラマの圧倒的な力を満喫させた。

サーリアホ作曲の③は謡曲の英訳を台本に、普遍的な神話としての世界性を、幻想的な音楽がもたらした。

他に東京二期会は「サムソンとデリラ」「ファルスタッフ」「ルル」の3本で、新鋭指揮者の起用など攻めの姿勢が好結果を生んだ。

クラシック（関西） 飯守泰次郎の神業 藤野一夫

- ①飯守泰次郎指揮関西フィルハーモニー管弦楽団（1月、ザ・シンフォニーホール）
- ②ムーティ指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団（11月、フェスティバルホール）
- ③鈴木秀美指揮神戸市室内管弦楽団・混声合唱団「メサイア」（12月、神戸文化ホール）

創設50年記念ワーグナー特別演奏会の①は、楽劇の一切を熟知した飯守にしかできない神業。「指環（ゆびわ）」の本質が細部に宿り、諸断片が結晶として全体を映し出す。壮大なライトモチーフの織物を紡ぎ上げた関西フィルの渾身（こんしん）の熱演、池田香織の絶唱も光った。

シューベルトの「グレート」第2楽章の白昼夢を通して愛と死を凝視するムーティ②。終楽章では、アポロ的造形美を背後から襲うディオニュソス的な根源の威力に圧倒された。

春に鈴木秀美を音楽監督に迎え、神戸が培ってきた両演奏団体の潜在力が瞬く間に世界水準に達した③。古楽奏法の絶妙なアクセントとリズムが躍動感に満ちた鮮烈な喜びを放射する。両プロ集団の融合の精華だ。最上のソリスト陣を招いた神戸のオラトリオ・シリーズに期待が弾む。

ポピュラー クリムゾンの輝き 渋谷陽一

- ①スーパーソニック2日目（9月、ZOZOマリンスタジアム）
- ②キング・クリムゾン（11月、東京国際フォーラム）
- ③桑田佳祐（11月、さいたまスーパーアリーナ）

①コロナ禍での特殊な形でのフェスティバル開催となった。突然2日目のトリがキャンセルとなったが、前日トリのスティーヴ・アオキが他の出演者とスーパーユニットを組んで出演。ドラマチックなステージを展開した。

②最後の日本ツアーになるとロバート・フリップが来日前に発言。それを裏付けるように代表曲を惜しみなく披露する、ファンには堪（たま）らない内容だった。コロナ禍にもかかわらず、地方を含めてどの会場も熱心な洋楽ファンが多数詰めかけた。

③久しぶりのソロでのライブ。2万人のアリーナが狭く感じるような、スケールの大きなロックショーを展開してくれた。でも不思議なアングラ感があって、桑田佳祐が何故ロックなリアルを持続けるのかがよくわかるライブだった。年齢を重ね、彼の表現はどんどん深みを増している。

ジャズ アセンション 再出発 青木和富

- ①佐藤允彦ノ・モーディスモ（2月、新宿ピットイン）
- ②Re:アセンション（4月、ブルーノート東京）
- ③海野雅威トリオ（11月、ブルーノート東京）

人の流れが止められ、2年がたった今年は、総じて流行よりも原点を振り返ることで、音楽の確かな歓（よろこ）びを再認識した1年だった。佐藤允彦の①は、日野皓正の帰国公演と共に、それぞれの音楽世界の楽しさの原点を再確認させた。

いわゆるフリージャズの原点となったジョン・コルトレーンの『アセンション』の回顧企画②は、普段なら凡庸なアイデアだったかもしれないが、日ごろの活動の枠を越えて集まり、エネルギーを集結することによって、この時代が仕組んだ一つの清算と再出発になった。③の米ニューヨークで暴漢に襲われるという大災難から復帰を遂げた海野雅威の凱旋公演は、あらためて人と人の出会いがこの音楽の土台にあることを教えてくれた。もうひとつ、上原ひろみの精力的なソロ活動は、こうした閉鎖空間だからこそ可能な、一点の光を求める確かな音楽として、この時代の記録と記憶に残るだろう。

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.